

談話室

わが大学の思い出

冶金学礼讃の記 —北海道大学—

山田 寛 之*

“豊かに稔れる石狩の野に、雁（かりがね）はるばる沈みて往けば、羊群声なく牧舎に帰り、手稲の頂き、黄昏こめぬ、雄々しくそびゆるエルムの梢……”。

これは、吾が北大恵迪寮明治 45 年度寮歌“都ぞ弥生”の一節である。札幌を離れ、早くも 11 年になるが、北大、そして札幌の名を聞く時、“都ぞ弥生……”で始まる一番より、この二番が心に浮ぶ。いや眼に浮ぶというべきであろうか。というも我が大学を語る時、札幌そして北の自然と切り離しては考えられないからである。それは社会に出て北海道以外の地に住む様になつて、その気候、そのもたらす風土といったものに画然とした北と南の差といったものがある。北の自然というのは、非常なお洒落で、しかも表情豊かにその装いを唐突に変えて行く。私自身学部の時、当時工学部西南端に在つた冶金棟の窓から、晩秋の夕暮、農場がゴッホの黄色に陰影をつけた様な波を打ち、紫紺の空が茜色に溶け込む際に、黄金色に縁取られた手稲山、そして眼前に黒いシルエットを浮び上がらせるホブラ並木、また院生時代、金研で、朝目覚めると、昨日迄緑色だつた白樺が一夜にして、原色の黄色に変じ、翌朝は銀杏、そのまた次は楓といった風に、表情を変えて行く様は、“自然は偉大だ！芸術は爆発だ！”などというのは陳腐な科白にしかならない。そこには、自然の多彩な意匠、しかも自ら作り上げた環境に合つた、多彩な衣裳に基づく化粧なのだろうか。多彩なのは自然だけではなく、我同期生も確かに多彩ではあつた。例えば、運動部や自治会の幹部、ロシア文学をやりたいと言つて転部したもの、南極越冬隊に加つて休学するもの、前歯が数本抜けていても愛車のタイヤを大事にするもの等、良く言えば個性の強い連中だつた。しかしながら、それが冶金学という学問を真剣に追求するという立場では必ずしも生きてはいなかつたと思う。それは、我々にとって冶金学というものが、物理と化学という“体系だつた学問”に対し、あたかもその両巨人の谷間に置かれたものという感じがしてならなか

* 新日本製鉄(株)八幡製鉄所

つた事であつた。これに関して、私の敬愛する友（仇名は“破れ一反風呂敷”）と終夜よく語り明かしたものであつた。その結論は、我々の行う研究というものにはフィロソフィーがなければいけない。（敢えて哲学としない。）それは、研究の結果がフィロソフィーを生み出すなら、これに越した事はないが、同時にそれは方法論であつても良いし、逆に新しい、フィロソフィーを作り出すなら、それに応じた方法論（ないしは仮説）を前提とする、という様なものであつた。

かといつて、冶金学が持つ一流でない学問という劣等感が、それで払拭されたわけではなく、とどのつまり、学位論文は、フィロソフィーの割には、非常に冶金的な結末で終わつてしまつたのである。

しかし社会に出て 11 年、私にとつて冶金学は、一流以上のものになつてしまつたのである。今やそれは、谷間の日蔭に咲く仇花ではなく、複雑に分化した諸体系を俯瞰し得るものと思える様になつて来た。（ちよつと言ひ過ぎかな〜。）それは、技術にとつて理論とは使えなければ意味がない。かといつて一元的に有効な理論はない。しかしその努力を怠れば後の進歩はない。カントは、“直観なき概念は空虚であり、概念なき直観は盲目であると言つた。まさしくその通りであろう。と同時に、体系化を考える時、梅原猛氏の言う“物事を常識でなく、理性で判断する”事の重要性を認識する必要があると思う。例えば、私の従事する製鉄技術の分野では、高炉解体調査によつて計り知れない技術的進歩があつた。しかしその結果をバイブル化し過ぎてはいないだろうか。曰く実炉休風時のレースウェーヨークスサンプルと、解体調査結果では、実炉の微粉が多過ぎるといつた意見もあるが、逆に解体調査では冷却過程で微粉が系外へ排出された可能性が強いのである。この様な常識が我々の周囲には、まだまだ多い。まさしく冶金学は、物理と化学その他諸々の体系より構成された学問であり、それが為、直観と概念のバインダーとなり得るであろう。

急がなくて良いと思う。自然は多彩でその迷路も多い。しかし昔、蘇東坡が言つた様に、“柳は緑、花は紅”である様に、自然はその姿、摂理を変えはしない。変わるの人は人の在り様であり、視点である。自然の悠久の流れの中で、今我々はもつと透徹した理性を求められているのではないだろうか。